高山城跡

【所　在　地】肝属郡肝付町新富 8341 他
【種　　別】国指定史跡
【指定年月日】昭和 20 年２月 22 日

肝付氏初代の兼俊が肝付郡弁済使（荘園の年貢を徴収する役人）となったのは，長元９（1036）年９月で，高山に居城したと伝えられている。そして，最初から現在の本城の地の高山城に居住していたと伝えられているが，詳しいことはまったく不明である。

当城は高山川に注ぐ本城川の北側，標高 82m を最高地点とする東から西へ伸びるシラス台地の先端とその周囲の山城である。

本城，山之城，肝付城ともいう。史料上の初見は 14 世紀半ばであり南北朝時代に整備され，大永４，５（1524，25）年頃，高山新城を築いてそこに移ったとある。当城は戦国時代の終わり頃まで肝付氏の居城とされた鹿児島県の中世を代表する山城である。

東方は国見連山に連なり，南と北は渓谷を隔てて小高い丘陵地帯となっている。城は南北 550m，東西 1300m，全体約 50ha で，本丸，二の丸など大きな曲輪が６つあり，二の丸の下段にある湯沸かし場や石落，弓場小路，東方の搦手門，西方の大手門，空堀，升形，馬乗馬場などが現在でも残っている。高山川の本支流の３つの川が合流した下方に水門跡があり，水をせきとめ，城の三面に水を満たすことができたと伝えられているが伝承の域を出ない。

古絵図によると「二の丸」の下の一帯２箇所に「此 辺 士 小 路」と記されており，中世には肝付氏の家臣団の屋敷があったとされる。

肝付氏は，天正２（1574）年に島津氏に降伏し，６年後の天正８（1580）年に薩摩の阿多（現在の金峰町付近）に移された。